緑の架け橋

会報第１３号
2008年7月15日

第９回植林緑化派遣団〔2008年3月28日~4月02日〕

根付かせる、継続させる、ために

～第９回植林緑化派遣団（2008年春）報告～

今期で終了する、中衛プロジェクト事業地で(2008. 3. 31)

今期から開始された「銀川プロジェクト」
事業地の記念碑の前で（2008. 3. 29）

2002年秋からスタートした日中緑化交流基金の助成による「緑化活動」は

紅寺堡プロジェクト
　330ヘクタール、595,100本（2002年から2005年）

平羅県プロジェクト
　290ヘクタール、1,667,800本（2004年から2007年）

中衛プロジェクト
　300ヘクタール、1,065,400本（2005年から2008年）

と推移し、紅寺堡プロジェクトを引き継いだ中衛プロジェクトの今期をもって、ひとつの区切りとなりました。

しかし、木々が根をはり根付くのに時間が必要なように、「継続」は大きな意味をもつのではないかと考え、新規のプロジェクトを開始することになりました。

「継続」に当たってのあり方は、新規に検討していくことになりますが、賛同の士を募り、可能な限り、活動の継続を追求していきたいと思います。

今期から開始された、銀川プロジェクトはＩ期目45ヘクタール、133,000本、石嘴山プロジェクトはＩ期目50ヘクタール、84,000本。

緑の架け橋推進センター
中国植林緑化活動協力事業

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 333 辻ビル 405　TEL. 03-3268-4387　FAX. 03-3268-6079
口座：中央労働金庫市ヶ谷支店（普）0858119　郵振：00130-9-425994

:本会報は事業主催（ＩＦＣＣ）の植林プロジェクト特集となります。

樹木の成長とともに
友好の成長も

緑の架け橋推進センター
会長　佐藤　晴男

寧夏回族自治区植林緑化活動式典での会長挨拶
(2008. 3. 29)

今回の第 9 回植林緑化派遣団は、新規計画の銀川市（寧東鴨子蕩ダム生態緑化モデル林)と石嘴山市（平羅県と別の場所)の 2 ヶ所における開工式と、中衛市における半日（最終）の開工式参加と記念植林でした。

特に銀川市における生態緑化事業は寧夏自治区の首都であることから、記念モデル事業の意味あいがあり、寧夏自治区、銀川市の党関係者、政府（市）関係者の出席と、地域住民は、軍隊、警察、官公庁職員、教育関係者、さらには自治会、学生（小、中、高校）等が多数参加して、開工式と記念植樹が行われたのが特徴でした。また、今回も気候的には冷気が漂う中、黄砂が舞い上がる等、自然の劣悪な気象条件を肌身で感じた植林でもありました。さらに緑の架け橋推進センターがモデル的に扱っている、紅寺堡の植林地は事後の検証を兼ねて見学してきました。管理人配置等により、それなりに管理の徹底がされ、順調に生育が確認されています。

今更言うまでもないが、2002 年にスタートした植林は、紅寺堡、平羅県、中衛市の 3 ヶ所ですでに約 920ha が植樹されています。しかし中国の広大な土地からみればほんの小さい「点」にすぎない実態です。これからの地域では緑が育み、林が形成されつつ、防砂と併せて換金作物（果樹）の栽培と生態系の改善は着実に進んでいることを参加者は確信を持てたと思っています。さらに共に汗をかいたり、劣悪な場所で記念植樹をした子供、学生達とは言葉は通じないがわずかな友好親善、相互理解を形成し、植林した樹々が大きくなるのと同様に友好も大きく育んで行くことだと確信しています。

御礼　～中国四川大地震被災者救援緊急カンパ　¥540,900 円～

緑を育む緑化植林活動を行っている当センターの趣旨から、緊急のカンパをお願いしてきましたが、短期間にもかかわらず、多くの賛同をいただきありがとうございました。大分の高倉誠二さんは、植林活動報告会なども地元で開いておられますが、今回、職場で「コーヒー一杯から」とカンパを呼び掛けられ 27 人、19、700 円を送ってこられました。

今回は都合、28 件、540,900 円をいただきました。植林活動の中国側カウンターパートの中華全国青年連合会を通じ、所定の送金を行います。ありがとうございました。

（順不同・敬称略）－2008 年 7 月 2 日〆切

阿久津善弘、君島一宇、高端照和、柴和範、重野安正、自治労富山県本部、菅野哲雄、
舟形町職員労働組合、自治労宮城県本部、東門利美、東門美津子、渡部進雄、又市征治、佐藤晴男、
総評会館、日森文尋、藤川敏朗、全農林労働組合、田辺和司、社保徳島支部、印刷センター、
佐藤原夫、和栗康俊、北原淳弘、福田勤、高倉誠二、鎌田篤則、中津市職員労働組合

第９回植林緑化派遣団（２００８年3月２８日～4月2日）活動報告

報告：小城市職員労働組合　川浪宏一

今回、私が参加した植林活動は中国の寧夏回族自治区という北京市より約１０００km、西にある自治区内の４つの都市で行われている植林緑化事業でした。活動拠点となったのは、その中でも中心的な都市となる銀川市（インチュアン）という都市でした。

この活動は、２０００年より日中両政府の協力のもと、行われている１つのプロジェクトであり、日本側の２００２年１１月に緑に関係する団体や趣旨に賛同する個人、団体で設立された「緑の架け橋推進センター」と中国側の中華青年全国連合会との間で行われており、現在までに完了した２つの事業で６２０ha、現在実施中の１つの事業及び今年から実施される２つの事業で７３０ha、計１３５０ha の植林を行うという日本側の支援事業でした。今回で９回目を数える「緑の架け橋推進センター植林緑化派遣団」の日本側の代表として参加したのは、予定より若干少ない総勢７名でした。

銀川プロジェクト事業地での植林（2008. 3. 29）

石嘴山プロジェクト事業地での植林（2008. 3. 29）

３月２８日（金）

成田空港より、北京経由で寧夏回族自治区へ

成田空港より約９時間かけ北京空港経由で移動を行い銀川空港へ到着するとそこには午後１１時を過ぎるというのに２０名近くの中青連及び現地の方による歓迎式典が準備されていました。

３月２９日（土）銀川市及び石嘴山市での緑化事業開工式・植林作業への参加

一晩明け、まず訪れた最初の視察先は、銀川市内の郊外で行われた寧夏自治区植林緑化活動式典でした。ここでは、今年から３年間で実施される銀川生態緑化林事業の開始を記念する開工式があり、銀川市及びその周辺から寧夏回族自治区長を始めとする党・政・軍幹部そして、官公庁職員や軍隊・学生など総勢２千名近くの方が参加され、１時間の間に２万本、１日で１０万本の植林が行われました。午後からは、銀川市の北部に位置する石嘴山市（セキシザンシ）に移動し、そこで今年より実施される日中青年石嘴山市生態緑化林事業の開工式及び植林作業に参加しました。ここでは、学生を中心とし植林事業を教育の一部として捉えた素晴らしい事業が行われていました。

３月３０日（日）黄河のかんがい施設及び西夏王陵遺跡の視察見学

中国での滞在２日目は、銀川市周辺で行われている植林事業及び人々の生活を支える黄河に設置されたかんがい施設（ポンプステーション）の視察を行いました。中国の内地にあたるこの地域は年に２～３度ほどしか雨が降らない少雨地域であるため、植林作業で植付けを行った木々が根付くまでの間、スプリンクラーにより散水が行われていました。その貴重な水源となっているのが、黄河であり、そこよりいくつものかんがい施設を経由し給水されている大規模な人工の湖でした。視察終了後、11 世紀からチンギス・ハンに滅ぼされるまでの約 200 年間栄えた西夏王陵の博物館及び陵墓の見学及び国営観光地である沙湖の見学を行いました。

３月３１日（月）

中衛市での植林作業及び紅寺堡での状況調査

滞在３日目に訪れたのは、今回の視察で最も内地、最西部に位置する中衛市（チュウエイシ）と紅寺堡（コウジホ）でした。ここでは、それぞれ中衛市が事業開始から２年目、紅寺堡が昨年事業完了ということもあり、植林事業で植付けされた木々の生育状況及び管理体制などを見学することができました。

今期で終了する中衛プロジェクトでの植林(2008. 3. 31)

中国での滞在３日間で、４つの植林事業を視察し感じたことは各地域で植林事業を中心とし街が形成され、また、植林事業が始まりとなり街を形成していくということでした。そのため、植林事業に対する現地の方々の強い思い入れを感じることができ、また、特に子供達からは植林事業への期待を強く感じることができました。

植林活動の開始事業地「紅寺堡」の保育状況視察後
(2008. 3. 31)

４月１日（火）

寧夏回族自治区より北京へ、
北京市内及び抗日戦争記念館の見学

そして、一路、銀川市をあとにし到着した北京では、日中戦争の始まりの地となった「盧溝橋（ロコウキョウ)」そして、この戦争の経過を知ることのできる、「抗日戦争記念会館」、中華人民共和国の象徴である「天安門広場」の見学を行いました。中国の視点からこの日中戦争を深く学び知ることができました。

４月２日（水）北京より成田空港・日本へ

そして、翌日には北京空港から成田空港へ、これにより６日間に及んだ「第９回緑の架け橋推進センター植林緑化派遣団」としての活動は無事終了しました。

この6日間で感じたことは、当たり前のようですが中国の国土は広大で人口が多いということ。そして、砂漠という過酷な環境の中で生活されている現地の方々に会うことで日本の自然の豊かさ、また、これらのことから中国での植林事業の本来の意義を知ることができました。さらに、日中戦争を深く学ぶことにより、平和の尊さ、大切さを再認識しました。
今後は、この旅の途中で派遣団の団長である佐藤晴男氏が中国の方々におっしゃられた「点の活動が線に、また面になっていくよう見守っていくことが我々の使命」との言葉どおり、この植林事業を通し、どのように日中友好が図られて行くのか。また、自分達が植付けした木々がどのように成長して行くのか興味深く見守って行きたいと思います。

第９回植林緑化派遣団参加者（７名）

氏名	所属	氏名	所属	氏名	所属
佐藤　晴男	当ｾﾝﾀｰ会長	海老原文彦	全農林	和栗　康俊	自治労・新潟
石橋　朋子	ＩＦＣＣ	飯田　　茂	全農林	吉池　　淳	自治労・長野
川浪　宏一	自治労・佐賀				